岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター

FIELD SCIENCE NEWS

FS NEWS
NO.8
Mar./15/2007

大東町の地域振興と農学部FSCの協力

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター長　岡田　秀二

FSCを中心とする農学部の教員、技術室職員、学生は、大東町に設立された山村型NPO「どんぐり協会」の活動に設立当初より協力をし、大きな成果を挙げつつあります。

NPO法人「どんぐり協会」の特徴は、①活動拠点として樹実豊かな森林を無償で借り入れ、地域内外の子どもたち、住民が一体となって森林空間を楽しみながら整備していること、②地域の老人たちの様々な生産と生活の匠が自然との接触を通して体験的・感覚的に伝えられるようになっていること、③希薄化しつつある地域内の人々のつながりや、地域内と域外の人々のつながりの契機を提供していること、④町全体の地域振興方法が政策と強く結びつくことから、小規模な大事な運動を忘れがちであり、NPOはこうした運動の地域における様々な存在を表に出す役割を果たしていること、等です。立ち上げて間もないにもかかわらず、多くの活動を行い地域に大きな影響を与えています。その多くの活動に農学部が支援しています。

以下に写真とともに活動の具体的な紹介を致します。

「どんぐり協会」は地域内資源の維持管理の一翼を担っています。その他にも、広葉樹の苗木生産の作業を請け負うこともしています。

「どんぐり協会」には地域の老人たちの様々な生産と生活の匠が多いことから、会員の人々にその匠の技の提供を行っています。

NPOの活動には、子どもたちがより身近に地域の自然に触れて・体験できるものが多くあります。

NPOと岩手大学との協働が生まれ、その関係が隣接する集落との関係に派生して行われたのが、この地域にある棚田の復元です。これは、その棚田において古代米を植え、その稲刈りを行っている様子です。

エクステンション トピックス

イーハトーブの森と家づくりフォーラム

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター　山本　信次

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター第1分野では、森林の持続的利用と地域の伝統的建築技術の伝承、安心安全な住まいづくりの3つを目標とした、林業・建築関係者ならびに一般向けの学習会「イーハトーブの森と家づくりフォーラム」を、これまで3年間にわたって開催してきている。本フォーラムは、センターと岩手県盛岡地方振興局、岩手県森林組合連合会木と家の相談所との共同開催であり、実行に当たっては盛岡市・滝沢村・雫石町内の林業関係者・製材業者・設計士、大工・工務店・マスコミ関係者と大学研究者による実行委員会が組織され、企画と実践を担当している。

本フォーラムは春夏秋冬、年4回実施され、森林・製材・建築のそれぞれの現地見学と解説からなっている。本年度は第1回「森林編」が、平成18年5月21日（日）に、参加者25名を迎えて開催された。内容としては、滝沢演習林を会場に森林観察ならびに森林施業の重要性についての解説が行われた。第2回「製材編」は平成18年8月27日（日）に参加者18名を迎え、盛岡市森林組合の製材工場の見学を行い、丸太が製材品になるまでの過程を学習した。第3回「住宅およびストックヤード見学編」は平成18年11月11日（土）に参加者27名を迎え、盛岡市内の県産材住宅の見学と遠野市内の製材品天然乾燥ストックヤードを見学し、住宅の設計・施工と木材流通についての学習を行った。第4回「演習林開設100周年記念住宅キザミ編」は平成19年2月4日（日）に滝沢村の工務店作業所において、参加者45名を迎えて開催された。第4回については、岩手大学演習林設置100周年記念行事の一環として、演習林から生産された木材でモデル住宅を建設する「演習林の木で家を建てよう」事業の一環として行われ、スライドを用いて演習林からの木材の伐り出し、天然乾燥、製材の過程を紹介した後、伝統的な手キザミによる材木の継ぎ手・仕口加工を見学した。以上のように本フォーラムは、現地研修を通じて異業種間ならびに生産者と消費者の交流を図りつつ、上記の3目標を達成しようとするものであり、好評を博している。今後とも本センターでは、本フォーラムに限らず、こうした大学と地域を結ぶ事業に取り組んでゆく予定である。

百数年生の伐根についての説明

第3回滝沢農場一般公開

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター　坂本　甚五郎

市民に親しまれる大学農場を目指して開催した滝沢農場一般公開も今年で3年目を迎えました。これまでに寄せられた来場者からの声や提案を取り入れながら第3回滝沢農場一般公開を11月12日に行いました。今年の公開の主な内容は農業・園芸相談、食味テスト、研究成果のパネル展示、馬術部による乗馬体験や子牛との触合い、農業機械試乗体験、滝沢演習林から木工製品の展示と販売のほか、農場で生産された米、味噌、花、野菜、ジャージー牛肉などの販売も行いました。

食味テスト・体験コーナーでは農場で生産されたブルーベリージュース、赤米、雑穀ご飯、りんご、サツマイモ、牛乳などの試食や試飲、さらに今年は、りんごの収穫体験も行ない来場者に楽しんでもらいました。

また、馬術部による乗馬体験や子牛の触合い、農業機械の試乗体験は子供たちに人気を集めていました。今回の農場公開は前日の強い雨のため開催が危ぶまれるほどの天候でしたが、当日は天候も回復し、近隣、盛岡市や八幡平市などから訪れた市民や家族連れなど700名を越える来場者となり、アンケートの多くは「来年も是非開催して」、「おいしさを満喫した」などでしたが、「暖かい10月頃の開催」や「土、日曜日の開催」の要望が寄せられました。約40名の学生ボランテアに支えられ、今年も無事、好評裏に終了しました。

ブルーベリージュースの試飲

学生ボランティアによる野菜販売

りんごの収穫体験

はるか研究会の取り組み

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター　渡邉　学

岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター滝沢農場で育成されたリンゴ‘はるか’は、黄色に着色し、小玉ではあるが、糖度が非常に高く、果肉が硬く、蜜が入り、また貯蔵性も良い品種である。

一般に‘はるか’はほとんど栽培されていない品種ではあるが、盛岡市は‘はるか’の‘ふじ’をも凌ぐ高糖度に注目し、栽培と流通を一体化した中で‘はるか’のブランドを確立するために、平成17年度に「はるか情報交換会」を立ち上げた。その後、平成18年度からは「はるか研究会」と改称した。この研究会は、盛岡市のリンゴ生産者北田正昭氏を会長とし、生産、流通、技術普及、大学の各関係者から構成されている。これまでの活動内容として、‘はるか’の栽培特性については情報が少ないため、現地検討会2回と情報交換会6回を行い、‘はるか’を栽培する際の工夫や問題点について情報交換を行った。また、‘はるか’は果面が汚れやすいため有袋栽培も行われているが、より良い果実を生産するため製袋会社から講師を招き勉強会も行った。

現在、‘はるか’は盛岡市内の百貨店で高値で販売されており、また、一部の果実については東京都の有名果物店において高級贈答品としても取引され、「はるか研究会」の成果が形となりつつある。この「はるか研究会」の活動を通して、大学発の研究成果であるリンゴ‘はるか’が地域に定着し、ブランド化されることを期待している。

収穫間近の‘はるか’

岩手大学演習林利用者の安全意識調査

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター　濱道　寿幸

平成19年2月6日～7日に東北森林管理局で開催された平成18年度森林・林業技術交流発表会において、「岩手大学演習林利用者の安全意識調査」をテーマに発表を行った。発表の内容は、滝沢演習林を訪れた人を対象に行ったアンケート調査の結果をとりまとめたものである。アンケート調査では、「森林内でどのようなものに注意しているのか」「森林内でどのような安全対策をしているのか」「森林管理者へどの程度の危険排除を期待しているのか」の3項目ににについて聞いた。その結果、「ハチや足元の危険については注意しているが、倒木や落枝、ウルシなどについてはあまり注意されていない傾向にある」「多くの人は長袖を着て森林内に入っているが、それ以外の対策はあまりとられていない」「森林内での危険に対し、（森林は）自然なので仕方がないと思う人が4割を占めるが、ある程度危険を排除すべきと思う人も3割強いる」ことが判った。

演習林内は、他の森林に比べて林道や歩道が整備され、比較的歩きやすいものの、自然の中であるということに変わりはない。人為的に排除可能な危険もあれば、野生動物による被害のように排除不可能な危険もある。また研究上の理由から人の手を加えていない林分も存在する。研究や実習で利用する際に不意の事故が起きぬよう、フィールドの管理者として利用者に呼びかけていく考えであるが、同時に利用者自身の心がけも重要であることについて注意を促していきたい。

海外語学研修を受講して

寒冷フィールドサイエンス教育研究センター　藤田　泰崇

平成18年9月5日より同11月18日までの期間、平成18年度岩手大学海外語学研修を受講した（ほかに受講者1名）。オーストラリアのメルボルンに本部のあるMONASH University English Language Center（MUELC）で、様々な国の留学生達と共に英語を学ぶ研修である。授業時間はEnglish skills classが120時間、Specialist skills classが80時間、Self studyが最低50時間となっており、これらの授業すべてが英語で行われた。

本研修では非常に多くのことを学んだが、その中でも特に印象に残っているのは、母国語を直訳するのではなく、あくまで英語から考える必要があるということである。例えば「私の気持ちを理解して下さい。」という文章を、我々日本人は「Please understand my mind.」と訳したがるが、実際は「Please understand me.」となる。このような違いは文化の違いに影響を受けているはずであり、言語を理解することは文化を理解することだと改めて痛感させられる毎日であった。

研修中、欧米系の食事とメルボルンの気候――一日の中に四季があるとさえ言われる―が身体に合わず、何度か体調を崩すことがあったが、様々な国の留学生達と交流を図り、お互いをより深く理解しようと努めることによりコミュニケーションの大切さに気づかされた。また彼らから多くの刺激を受けることができた。今後、身に付けた能力の維持・向上に努め、海外から訪れる研究者への対応や留学生のケアなどに生かしていきたい。

生徒によるディスカッションの様子

地域への貢献の展開（平成18年度）

職業的専門家対象

森林･林業技術者のためのスキルアッププログラム―青少年のための森林環境教育―	H18年	5月22日(月)～5月26日(金)
環境社会学研究者のための森林セミナー	H18年	6月10日(土)～6月12日(月)
いわて農業者ビジネスカレッジ	H18年	6月16日(金)～1月31日(水)
繁殖技術研修会（大野：第5回）	H18年	7月7日(金)
繁殖技術研修会（大野：第6回）	H18年	11月28日(火)
繁殖技術研修会（葛巻高原牧場：第1回）	H18年	12月22日(金)
繁殖技術研修会（大野：第7回）	H19年	2月23日(金)

一般市民・児童生徒対象

イーハトーブ森と家づくりフォーラム（森林編）	H18年	5月21日(日)
第62回フィールドセミナー「総合的学習時間における森林学習15」	H18年	5月26日(金)
第63回フィールドセミナー「総合的学習時間における森林学習16」	H18年	6月1日(木)
第64回フィールドセミナー「総合的学習時間における森林学習17」	H18年	7月4日(火)
フィールド科学体験教室「ブルーベリーの収穫とジャム加工」	H18年	8月8日(火)
総合的学習の時間における森林学習	H18年	8月24日(木)
イーハトーブ森と家づくりフォーラム（製材編）	H18年	8月27日(日)
第1回　哲学者　内山節氏を迎えての「哲学の森」	H18年	9月9日(土)～10日(日)
森の木で学校をつくり隊プロジェクト（フィールドワーク編）	H18年	9月19日(火)
森の木で学校をつくり隊プロジェクト（工場見学編）	H18年	10月31日(火)
イーハトーブ森と家づくりフォーラム（住宅およびストックヤード見学編）	H18年	11月11日(土)
上流・下流連携シンポジウム―上・下流域ームラとマチの連携・Ⅲ―	H18年	11月26日(日)
イーハトーブ森と家づくりフォーラム（演習林100周年記念住宅　キザミ編）	H19年	2月4日(日)
森の木で学校をつくり隊プロジェクト	H19年	2月19日(月)
第65回フィールドセミナー「かんじきをはいて冬の森を歩こう」	H19年	3月4日(日)
第66回フィールドセミナー「親子で楽しむ冬の生き物観察」	H19年	3月18日(日)

センター開放的事業

滝沢農場一般公開	H18年	11月12日(日)

岩手大学農学部における卒業論文・修士論文テーマ公募に関するお知らせ

岩手大学農学部では岩手大学中期計画に基づき、地域社会のニーズの吸い上げと研究結果の地域社会との共有化を目的とし、卒業論文・修士論文のテーマを公募することとなりました。農学部における卒業論文・修士論文の研究のテーマとして取り上げてもらいたい事項の御希望がございましたら、下記までメールまたはFAXにて御連絡ください。折り返し、御連絡し詳細について御相談させていただきます。御応募をお待ちしております。

注）卒業論文・修士論文のテーマは、学生・院生自身の希望も重視して設定されます。御応募いただいたテーマが、そのままの形で、すぐに研究に移されるかどうかについては確定できない部分もございますことをあらかじめ御了承ください。

【応募先】〒020－8550　岩手県盛岡市上田3丁目18-8　岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター事務部
FAX：019-621-6664　E-mail：fsciu@iwate-u.ac.jp

岩手大学農学部附属寒冷フィールドサイエンス教育研究センター
〒020-8550　盛岡市上田3丁目18－8　TEL：019(621)6234
E-mail:fsciu@iwate-u.ac.jp　http://news7a1.atm.iwate-u.ac.jp/~ fsciu/

発行責任者／寒冷フィールドサイエンス教育研究センター長　岡田　秀二
編集責任者／寒冷フィールドサイエンス教育研究センター　山本　信次